現代インド研究　第 1 号 159–176 頁　2011 年
Contemporary India, Vol. 1, 2011, pp. 159–176

研究ノート

創成期の用語「カシミーリーヤット」について

拓　徹 *

Kashmiriyat: The Term in Its Embryonic Phase

TAK Toru

Abstract

The term ‘Kashmiriyat’ is of relatively recent origin (mid-1970s) and its meaning has undergone several changes since then. Yet during the early 1990s, while the secessionist militancy in Kashmir was at its peak, a set of meanings (secular syncretism as the essence of Kashmiri tradition; ethnic sub-nationalism of Kashmiri Muslims) was given and fixed to the term in the Indian / international public discourse on Kashmir, and this created the dominant usage of the term still prevalent today. This paper traces the little-studied history of the term ‘Kashmiriyat’ from its birth in the mid-1970s, and contemplates the historical significance of the term’s creation.

要旨

カシミール問題／紛争の分析にしばしば用いられる用語「カシミーリーヤット」が歴史的に初めて登場したのは 1970 年代半ばのことである。一般化した現在のカシミーリーヤット概念は主にカシミール人のエスニック・アイデンティティー、もしくはカシミール独特のセキュラーな諸宗教混在文化を指すが、創成期におけるこの用語の意味・用法はこれとはやや異なるものだった。本稿では、これまで顧みられることのほとんどなかったこの用語誕生のいきさつとこれをとり巻くカシミールの政治・文化状況に光を当て、この用語が 1970 年代半ばに登場した必然性は何だったのか、そしてこの用語の創成期の意味・用法がその後別のものにとって代わられたことの意味は何なのかについて考察を試みる。

1. はじめに

印パ独立時の係争に端を発するカシミール問題は、いらい 1965 年の第二次印パ戦争を引き起こすなど印パ関係／国際政治の焦点であり続け、1980 年代末からはインド国内分離主義ゲリラ紛争の色彩をも加え現在に至っている。このゲリラ紛争の担い手はインドのジャンムー・カシミール州

*　ジャンムー大学社会学部博士課程

・　“Power, Knowledge and the ‘Communal’ Discourse: A Study of Kashmiri Pandits”,（博士論文、審査終了）。

・　2005、「カシミール人権政治の諸相」、『アジア・太平洋人権レビュー 2005』、現代人文社、181–185 頁。

内カシミール地方のマジョリティー住民であるイスラム教徒カシミール人だが、とくにこのゲリラ紛争を中心にカシミール問題を論ずる際よく用いられるのが、これらイスラム教徒カシミール人の「エスニシティー」もしくは「サブ・ナショナリズム」の概念であり、またカシミールにおけるエスニック／サブ・ナショナル・アイデンティティーを指すのに用いられる「カシミーリーヤット」（Kashmiriyat）の語である。（以下「JK」はジャンムー・カシミール、「カシミール」はインド領JK州内カシミール地方を指す[1)]。）

概して普遍的な説明概念として扱われがちな「カシミーリーヤット」だが、この語自体の起源は意外に浅い。カシミール出身であり、カシミールをフィールドとする文化人類学者T. N. マダーンによれば「まず強調しておきたいのは、カシミーリーヤットという言葉がカシミール語の語彙にはないことである。従って、これをネイティヴの解釈カテゴリーと規定するのは難しい。むしろこれはパンジャービーヤットの人工的な複製語であり、1980年代より前に遡ることのない近年の造語である。」［Madan 1995: 63］これを補足すれば、「カシミーリーヤット」の語が英語文献に初めて登場するのは1980年代のことだが、この用語の歴史的な起源は後述のように、1970年代半ばのカシミールにおけるウルドゥー語日刊紙ほかの諸言説にあった。また当時この用語にあてられた意味とニュアンスは、1990年代以降一般化した現行のそれとはやや性質を異にしていた。

カシミール問題は、問題そのものの複雑さもさることながら、その問題をめぐる言説・語り口が多様を極める点にも難しさがある。またこうした言説・語りの難しさは、確実にカシミール問題そのものをより複雑なものにしてきた。本稿ではこうしたカシミール問題をめぐる言説研究の一端として、用語「カシミーリーヤット」の創成期に光を当て、なぜこの時期にこうした用語が登場したのか、またこの創成期の意味・用法が現行のそれにとって代わられた事実は何を意味するのかについて考察を試みたい。

2. 先行研究における用語「カシミーリーヤット」

創成期の用語「カシミーリーヤット」について触れる前に、これまでのカシミール研究（20世紀のカシミールをめぐる、主に政治学・歴史学分野の研究）においてこの用語がどう扱われてきたかについて、ここで一通り触れておきたい。

具体的には、焦点を便宜上三つの代表的な先行研究に絞ってこれを概観したい。このうちの二つは1990年代初頭、学術研究におけるこの用語の最初期の使用例となり、それぞれこの用語に「セキュラーなカシミールの文化伝統」「カシミール人のエスニック・ナショナリズム」という、その後の学術研究においてポピュラーになる定義を他に先がけて与えたジャーナリストM. J. アクバールの著書と政治学者アシュトーシュ・ヴァーシュニーの論文である。彼らのこうした著述は、用語「カシミーリーヤット」をめぐる代表的な先行研究例であると同時に、創成期のこの用語が持っていた意味・用法を打ち消すにあたって力のあったパワフルな言説でもあった。そして最後に検討するのは、90

年代初頭以降の学術研究におけるこの用語の使用法を批判し、大枠において本稿筆者もその見解を共有する歴史学者チトラレーカー・ズチの著書である。

2-1. 典型的な使用法（アクバールとヴァーシュニー）

インドを代表するジャーナリストの一人 M. J. アクバールによる『カシミール―ヴェールの向こう側』[Akbar 1991] は 1991 年に出版された。出版当時のインドでは、89 年末いらい日々流れるカシミール・ゲリラ紛争の報にさらされながら、人々の手元にはカシミールについての適切な概説書がないという状況が存在した。従って、ややジャーナリスティックだが読みやすいアクバールの本書の出版は時宜にかなったものであり、本書が用語「カシミーリーヤット」とその代表的な定義「カシミールのセキュラーな文化伝統」の人口への膾炙において大きな影響力を持ったことは想像に難くない。

アクバールはまず本書の第一章で、15 世紀カシミール詩人聖者たちに代表される「調和」(harmony) や「ヒューマニズム」に満ちたセキュラーな文化こそカシミールの本質であると規定する（これら詩人聖者たちの詳細については後述）。そのうえで、続くその後の各章では、第一章で規定したカシミールのセキュラリズムを「カシミーリーヤット」の語に象徴させ、古代から現代に至るカシミール史のレビューを通じて、カシミーリーヤットの存在とカシミールの繁栄が歴史的に同義だったことを強調し、「カシミーリーヤット」＝「カシミールのセキュラーな文化伝統」を称揚した。

カシミールには少数だが重要なヒンドゥー教徒（カシミーリー・パンディット）のコミュニティーが存在し、カシミールのこの少数派ヒンドゥー教徒と多数派イスラム教徒の関係は印パ分離独立期の北インド一帯におけるコミュナル暴動の混乱の中でも平穏を失わず、このためネヘルーはインド独立直後、カシミールの比較的良好なヒンドゥー・ムスリム関係を「カシミールのセキュラリズム」として絶賛した。アクバールは本書で用語「カシミーリーヤット」を、こうしたネヘルーによる「カシミールのセキュラリズム」を再定義する形で用いたといえよう。

アシュトーシュ・ヴァーシュニーの論文「三つの暫定的ナショナリズム―カシミールはなぜ問題であり続けるのか」[Varshney 1992] は、1990 年代初頭を代表するカシミール問題研究論文集『カシミール問題の諸展望』への収録論文として発表された。この論文における「カシミーリーヤット」[2] の位置づけは、議論の冒頭に置かれた次の一文に明らかに示されている。「その本質において、カシミール問題は三つの勢力の帰結である。ここでいう三つの勢力とは、パキスタンに代表される宗教ナショナリズム、インドが体現するセキュラー・ナショナリズム、そしてカシミール人が*カシミーリーヤット*（カシミール人らしさ）と呼ぶところのエスニック・ナショナリズムのことだ。これら三つの勢力はいずれも、その内部に論理破綻、矛盾、およびパラドックスを抱えている。」[Varshney 1992: 196] つまり、ヴァーシュニーは「カシミーリーヤット」を「カシミール人のエスニック・ナショナリズム」と定義したわけである。

ヴァーシュニーのこの論文の主眼は、上記「三勢力」がいずれもカシミールを自らのものと主張

するうえで充分な正当性に欠けていることを示す試みにある。そしてこのうち「カシミーリーヤット」＝「カシミール人のエスニック・ナショナリズム」の勢力については、それがJK州内ジャンムー地方とラダック地方の、カシミール人とは異なるエスニシティーを持つ人々を計算に入れていない点を指摘し、カシミール人のエスニック・ナショナリズムのみに基づくJK独立の主張には正当性が欠けていると述べた。ヴァーシュニーは以上のような議論を通じて、カシミール問題解決の糸口が「カシミーリーヤット」＝「カシミール人のエスニック・ナショナリズム」の中に存在しないことを述べ、その限りでカシミーリーヤット概念を批判した。

2-2. 典型的な使用法に対するズチの批判

ところで、上記論文におけるヴァーシュニーの言説は、暗黙のうちに用語「カシミーリーヤット」を、当時すでにインド内外で常識化しつつあったその意味内容、すなわちカシミール人のナショナリズム（独立志向）と「エスニシティー」の概念を掛け合わせた「カシミール人のエスニック・ナショナリズム」という意味内容に結びつけて議論を進めている。つまり、ヴァーシュニーの議論におけるカシミーリーヤット批判は、この用語にある特定の意味内容を与えた結果成立した概念の批判ではあっても、この用語とその意味内容の結び付きそのもの、およびその成立過程の批判とはなっていない。そればかりかむしろ、彼の議論における用語と意味内容の結びつけは、その論述の学術性によってより明確かつ固定的なものとなっているといえるだろう。

カシミーリーヤット概念の成立過程へのこうした参照の欠如は、この概念の自明視と、南アジア地域史への、歴史的変化を無視したその適用につながりかねない。つまり、この用語がカシミール地方の文化、社会もしくはネイション全体の性質を指すことを前提としている以上、用語「カシミーリーヤット」にどんな特定の意味内容を与え、その結果どんなカシミーリーヤット概念が成立しようとも、この概念の自明視とその成立過程への無視は、「カシミール」というカテゴリーが時空を超えてつねにひとつの「文化」「社会」「ネイション」であることを無批判に受け入れることになりかねないのである。（このような批判はむろん、ヴァーシュニーだけでなくアクバールにも当てはまる。）

こうした観点からそれまでの「カシミーリーヤット」をめぐる学術行動を批判したのが、2003年に出版されたチトラレーカー・ズチの研究書『帰属の言語―イスラム教、地域アイデンティティー、そしてカシミールの創出』［Zutshi 2003］である。やや長くなるが、この点をめぐる彼女の見解がよく示された序章の一部分を以下に訳出してみたい。

> ナショナリストの言説、とくに国家政府によって支援されたそれは、その国の過去についての統一性と一貫性を付与された見解によって性格づけられ、その内部の差異、不和、矛盾に関してはこれを覆い隠すことが是とされる。そしてこれは国の歴史について言えるだけでなく、国民国家をその当然の帰結としてもたらすナショナリスト運動の歴史につい

ても言えることである。カシミールの場合、インドとカシミールのナショナリスト言説が一体となって、カシミールの歴史と文化的アイデンティティーについて、カシミーリーヤットとして広く知られる概念を通じて定義づけを行った。……

カシミールをめぐる公共言説におけるカシミーリーヤットの無差別な許容は、間違いなく、ときに重なり合い、分岐し、ぶつかり合う二つの相互に結びついた政治的プロジェクトの要である。この政治的プロジェクトの一つ目は、唯一のナショナリズムに基づく統一インド国民国家の言説であり、二つ目は、地域化・複数化した諸アイデンティティーに基づく、高度に連邦化されたナショナリズムの言説である。カシミールについての学術研究、とくにその［印パ分離独立時の］インド加入と近年の政治蜂起をめぐる研究は、大まかに言ってこの二つのカテゴリーのいずれかに属するといえる[3]。そしてこのようなものとして、こうした学術研究は無条件にカシミーリーヤットの概念を受け入れ、その起源、定義、歴史的偶然性について批判的に検討することを放棄し、その結果、歴史と諸アイデンティティーとナショナリズムの間に存在するのっぴきならぬ関係については関知せぬままである。これに対して本書では、カシミーリーヤットを歴史的存在として位置づけ検討の対象とし、これらの作業を通じて、カシミールの地域的諸アイデンティティーがこれまで考えられてきた以上に曖昧であり、またそれが明らかに、カシミーリーヤットの用語が信じ込ませようとする内容以上に複雑であることを強調する。［Zutshi 2003: 2–3］

このような観点からズチは本書で、主に19世紀末から20世紀初頭のカシミール人の筆になる諸テキストにおける「カシミール」カテゴリーの推移や、イギリス植民官僚による19世紀末の土地改革がもたらしたカシミール経済構造の変化、およびこれに伴って現れた新たな「カシミール社会」の構造とその成立過程などについて分析を展開する。こうした分析は、「カシミール」「カシミーリーヤット」といったナショナルな枠組／概念を当然視せず、これらもまた生成変化を繰り返す歴史的被造物であることを前提として初めて成立するものだった。

ズチは本書でカシミーリーヤット概念の成立時期を明確に特定していないが、シェイク・アブドゥッラーが1940年代末から50年代初頭にかけてのその最初のJK州政権期[4]においてこの概念の宣伝に努めたこと［Zutshi 2003: 2, 318］、またこの概念の起源がカシミールの文化社会的土壌のみには存せず、その成立過程にはインドとカシミールのマジョリティー主義的ナショナリズムの共謀が作用していたこと［Zutshi 2003: 257–258］を述べており、おおまかにその成立時期を印パ分離独立直後の数年間と考えていることがうかがわれる。事実、カシミール文化・社会の伝統を「セキュラー」と見なす必要性は、その住民の過半数がイスラム教徒だったJK藩王国をインド領土内に引き入れる戦略のうえでのみ初めて出てきたことであり、セキュラリズムがインドとカシミールの共通項であることを強調する意味でのカシミーリーヤット概念は、確かにその起源を印パ分離独立直後の数年

間に持つと考えられる[5)]。

2-3. ズチの使用法における曖昧な点

なおその著書でズチは、インド独立直後の時期のアブドゥッラーによるカシミーリーヤット概念の宣伝努力について、次のような文章を記している。「その短い統治期間において、アブドゥッラー政権は相当の時間と資源をそのマントラ――*カシミーリーヤット*――のプロパガンダに捧げた。私が以前提示したように、このセキュラー言説は、この州に存在し、いやましに目につく宗教的、地域的、言語的な亀裂を省略してみせる。」［Zutshi 2003: 318］

ここでズチは「カシミーリーヤット」について、それがアブドゥッラーによって宣伝された「セキュラー言説」（secular discourse）を指すことを示唆している。しかし、この一文を読む読者は、あたかもシェイク・アブドゥッラーが「カシミーリーヤット」という用語を繰り返し使ってその宣伝に努めたように感じはしないだろうか？この一文に典型的に示されるように、ズチの著書では、「カシミーリーヤット」が一組の概念体系を指すのか、文化の政治をめぐる特定の言説群を指すのか、あるいはこの特定の用語自体を指すのかが曖昧になっており、またこの曖昧さは、ズチが「カシミーリーヤット」という用語の起源について全く言及していないことにより増幅されている。

実際には、後述するように用語「カシミーリーヤット」の起源は1970年代半ばにあり、印パ独立直後のアブドゥッラーによる「セキュラーなカシミールの文化伝統」の宣伝においてこの用語は姿を見せなかった。しかし、ズチが一般的にカシミーリーヤット概念として言及するいわゆるセキュラー・カシミールのイデオロギーが姿を現したのは、上述のように印パ独立直後の時期のことである。

それでは、1970年代半ばの時点において、こうしたセキュラー・カシミールのイデオロギーが再提出される際、それはなぜ「カシミーリーヤット」という用語の創造を伴わなければならなかったのだろうか。いずれにせよ、ズチが述べるように、「カシミーリーヤット」の用語・概念・言説などについてその「起源、定義、歴史的偶然性について批判的に検討」しようとするならば、この用語の起源の検討は不可避のはずである。本稿ではとりあえず、これまで顧みられることのほとんどなかった「カシミーリーヤット」用語誕生のいきさつとその背景にある文化の政治について、次章で叙述してみたい。

3. 用語「カシミーリーヤット」の誕生とアブドゥッラー政権の文化の政治（1975～82年）

3-1. 時代背景

用語「カシミーリーヤット」誕生の直接の背景は、1975年カシミール合意（Kashmir Accord）直後のカシミール人知識人たちの政治的ジレンマにある。このジレンマは、一言でいえば、それまでカシミール分離主義の象徴的存在だったリーダーが人々の期待を裏切って分離主義を撤回したにもかかわらず、知識人を含むカシミールの人々が結局、彼のリーダーシップとカリスマ性を拒否しき

れなかったために生じた。この過程をもう少し詳細に述べると、以下のようになる。

1930年代初頭以降その死までカシミール最大の政治的カリスマであり続けたシェイク・アブドゥッラー（Sheikh Mohammad Abdullah、1905 ～ 82）は、JK州首相在任中の1953年にJK独立を唱え始めたため、インド中央政権によって逮捕・投獄された。以来出獄・投獄を繰り返すなか、アブドゥッラーは分離主義団体「国民投票戦線」（Plebiscite Front、1955年創立）のリーダーとしてカシミールをめぐるインド政府の反民主的政策を糾弾し続け、カシミールにおける分離主義を象徴する存在となった。（ここで言う「分離主義」は主にJKのインドからの分離独立主義を指すが、ファジーな形で反インド・親パキスタン感情をも含む。）ところが1971年末の第3次印パ戦争・バングラデシュ建国とこれに伴うパキスタンの弱体化に直面し、アブドゥッラーは72年に「インド憲法の範囲内での和解」、つまりJK独立という選択肢を含まない形での和解に向けてインド政府と交渉を開始する。この動きの結実が75年にインディラ・ガーンディー（当時インド首相）とシェイク・アブドゥッラーの間で交わされたカシミール合意であり、これによりアブドゥッラーの国民投票戦線はJK独立の選択肢を捨て解散、その見返りとしてアブドゥッラーの州首相就任とJK州の自治権拡大が約束された。そしてこの一連の交渉と合意、それに続くアブドゥッラーの州首相就任は、すべてJK州人民の民意を問わないまま遂行された。

カシミールの人々、とくに政治意識の尖鋭な知識人たちは当時、アブドゥッラーのこうした政治行動を権力獲得のための妥協・民意への裏切りと感じる一方、長い獄中生活を通じて節を曲げなかったアブドゥッラーのこの選択（インドの地域大国化の状況下、インド国内での最大限のJK州自治を追求）のやむを得ない性格も理解できたため、非民主的な政治過程に不満と矛盾を感じつつ、とりあえず事態を静観せざるを得なかった。そしてこうした不満と矛盾に一応の解決・捌け口を与えるべく登場したのが、用語「カシミーリーヤット」とこれを用いた言説だったのである。

3-2. 用語誕生のいきさつ

この創成期における用語「カシミーリーヤット」とその用法については、インドやカシミール現地においても研究がほとんどなく、資料に乏しい。しかし、現地知識人によるものを含む1980年代初頭までの英語文献にこの用語の使用例が皆無であること、カシミールを代表する社会史家モハンマド・イシャーク・カーン（Mohd. Ishaq Khan）が1983年に出版した著書の中で「カシミール合意に続いてナショナル・コンフェレンス［再編成されたシェイク・アブドゥッラーの政党］が州政権に就いて以来、カシミーリーヤットの概念がカシミール地元のウルドゥー語日刊紙に繰り返し登場するようになった」［Khan 1983: 22］と「カシミーリーヤット」の語を用いて明確に述べていることなどから、この用語がカシミール合意に続く数年の間に誕生し、徐々に広まって行ったことが推定できる。ここではこの用語誕生のいきさつを、自身もこの用語の普及に大きくかかわった上記の社会史家イシャーク・カーンへのインタビューにより再構成してみたい。

当時カシミールの首都スリナガルで研究生活を送っていたカーンが「カシミーリーヤット」という言葉を初めて耳にしたのは、やはりカシミール合意後しばらくのことだった［カーンへのインタビュー、2008年9月24日於スリナガル、以下KI］。誰が最初にこの語を使ったかは不明だが、カーンが初めてこの語に出会ったのは、当時カーンの同僚だったイブン・メフジュール[6]の次のような発言においてだったという。「［JKにとって］いまやパキスタン［併合］という選択肢は消えた。シェイク・アブドゥッラーが我々を売り渡した以上、独立の選択肢も消えた。残された選択肢は一つだけだ。我々は、カシミールに根差しカシミールの文化を護持する地域勢力を支持すべきなのだ。それこそがカシミーリーヤットというものだろう。」やがてこの語は、当時カーンが出入りしていたJK文化アカデミーなどの知識人の会話に頻出するようになり、ほどなくしてカシミールのウルドゥー語諸紙の論説にも登場するようになった[7]。当時カシミールの論壇では「尊厳の場所」（ābrū ka makān）をめぐる議論が沸騰していたが、「カシミーリーヤット」の語はこの議論の文脈で用いられたという（議論の骨子：アブドゥッラーは我々のために尊厳の場所を約束したはずではなかったのか？その場所は何処へ行ったのだ？我々の郷土はインドとは一線を画している。ならばカシミーリーヤットのための場所は何処なのか？）[8]。［KI］

つまり、その創生期において「カシミーリーヤット」の語は、州首相＝権力の座に就いたシェイク・アブドゥッラーに対し、彼が州首相になったのは本来何のためだったかを絶えず問い、誡める目的で発せられた。当時の「カシミーリーヤット」は体制側の言葉ではなく、カシミール合意後のアブドゥッラーの政治を基本的には受け入れつつ、同時にそこから批判的な距離を取ろうとしたカシミール知識人たちに属する在野の言葉だったのである。

3-3. アブドゥッラー政権の文化的ナショナリズム

シェイク・アブドゥッラーおよびその政府の息のかかった機関であるJK文化アカデミー[9]がアブドゥッラーの生前「カシミーリーヤット」の語を使用することはなかった。が、アブドゥッラーとこの文化機関はアブドゥッラー晩年政権期（1975～82年）、カシミール世論におけるめざましいアイデンティティー意識の高揚を受け、全力をあげてカシミール文化の定義付けとその称揚に努めた。

カシミール人政治学者・コラムニストのマンズール・ファズィリによれば、この晩年政権期アブドゥッラーの政治演説では、カシミール人がひとまとまりの国民（qaum）であることが繰り返し強調され、「この国は我々のもの、その未来を決めるのは我々だ」（Yeh Mulk Hamārā Hai, Is ka Faislah Ham Karengē）というスローガンが常套句のように用いられた。「この［カシミール］国（nationhood）の概念は彼［アブドゥッラー］とともに、彼の時代において生成したものである。その政治的挫折と栄光は、近年における彼の文化的同定（cultural identification）の思想とあいまって、最晩年の日々まで彼に以前と同様の重要性を与えた」［Fazili 1987: 72–73］。晩年政権期アブドゥッラーのこうした傾向を最も象徴するといわれるのが、ビハール州パトナにあるユースフ・シャー・チャク（Yusuf

Shah Chak）墓参・記念碑建立事業である。かつて「独立カシミール」を守るべくムガール帝国軍と戦い、その後アクバール大帝によってパトナへ流され同地で没したというこの伝説的人物を「カシミールのフリーダム・ファイター」として称揚する身振りの中には、あきらかにカシミール・アイデンティティーの回復／創造という狙いが隠れていた。なお、このチャク墓参をアブドゥッラーに提案したのは、当時 JK 文化アカデミーの長（Secretary）であり、シェイク・アブドゥッラー自伝の筆記者として著名なモハンマド・ユースフ・テン（Mohd. Yusuf Taing）だったという。[KI; Khan 1983: 序章]

このアブドゥッラー晩年政権期において JK 文化アカデミーがとくに力を入れた事業が、カシミールでその詩が代々愛唱されてきた 15 世紀の二人の詩人聖者シェイク・ヌールッディン／ナンド・リシとラール・デード[10]の、カシミール文化の祖としての定義付けだった。14 ～ 15 世紀はスーフィズムを通じて大多数のカシミール人がイスラム教徒となった時期であり、多くのカシミール人がこれら二人の詩人聖者の詩を通じてイスラム教に目覚め、またヒンドゥー教の信仰を深めたと考えられている（カシミールのヒンドゥー教は伝統的にシヴァ神信仰の一神教であり、形式的に必ずしもイスラム教と矛盾しなかった）。重要なのはこの定義づけにおいて、ある種の土着聖者だったこれらの詩人の作品におけるヒンドゥー教的要素とイスラム教的要素の混在を、あらためてカシミール独自のセキュラリズムの源流と捉え直した点である。この定義の影響力は非常に強く、これ以降のカシミール文化もしくはカシミールのセキュラリズムをめぐる議論には、必ずと言って良いほどこの二人の詩人聖者が登場することになった。そしてこうした文化的な定義づけは、当時のアブドゥッラーの基本姿勢、つまりカシミールの文化的アイデンティティーと政治的自治を地元の人々にアピールする一方、インドの中央政権と世論に対してはカシミールのセキュラーな性格とそのインド・セキュラリズムとの親和性を強調する姿勢と合致するものだった。

このうちとくにシェイク・ヌールッディン／ナンド・リシに関しては、各種セミナーでしばしばこの詩人聖者についての研究発表がなされたほか、JK 文化アカデミーとも協調関係にある政府系文化機関「カシミール・カウンシル・オブ・リサーチ」により彼についての学術セミナーが 1978 年に開催され［Pandit 1997: 119］、またカシミール語原文に英訳を付けたその詩篇により構成された詳細な伝記『多様性の統一』（Unity in Diversity）が 1984 年、JK 文化アカデミーにより刊行された。もともと 79 年に刊行予定だったという同書の巻頭には 80 年 2 月付のアブドゥッラーによるメッセージが掲載されており、そこでアブドゥッラーは「本書のタイトルこそまさにこの詩人聖者のエッセンスを要約している」と述べている［Parimoo 1984］。同書のタイトルとなった「unity in diversity」は、インドでは一般的にインド独自のセキュラリズムを指すものとして広く流通しているフレーズである[11]。

なお、これら詩人聖者の詩の性質は、正確に言えば、そこに現行の「ヒンドゥー教」「イスラム教」といったカテゴリーを適用できるようなものではない。例えばシェイク・ヌールッディン／ナンド・リシの原形態に近いと思われる諸詩篇にシヴァ神信仰を指すと思われる語彙や「ムサルマーン」（イ

スラム教徒）の語が頻出するのは事実だが（Parimoo 1984を参照）、そこに今日言うところの「ヒンドゥー教」と「イスラム教」の融和・協調としての「セキュラリズム」を見るのは基本的にファンタジーであると考えられる[12)]。

3-4. カシミール政治史の読み替え

このアブドゥッラー晩年政権期において、カシミール文化と並行して検討・定義づけの対象となったのが20世紀前半のカシミール政治史である。当時、印パ独立以前のカシミール政治史に関しては、同時代人としてその政治過程に深くかかわったP. N. バザーズ（Prem Nath Bazaz、1905～84）による貴重な記録［Bazaz 1954; Bazaz 2002］を除けば、客観的な見直し・研究はほとんどなされていない状況だった。そしてカシミール文化の場合と同様、20世紀前半カシミール政治史に関しても、この時期にあらためて上述アブドゥッラーの政治的立場から「セキュラー」な定義づけが行われ、その後のJK現代史観に強い影響を残すことになる。

この歴史再検討の動きの嚆矢となったのが1978年9月にカシミール大学歴史学部の主催で行われた「JKにおける解放闘争（Freedom Struggle）」についての6日間の学術セミナーである。その開会式はやはり州首相シェイク・アブドゥッラーのスピーチで始まった。同セミナーの成果は1980年に単行本（論文集）［Yasin and Rafiqi 1980］として出版されたが、その内容の方向性は当時のカシミール大学長（Vice Chancellor）による同書序章の次の一文に顕著である。「当セミナーにおける諸発表と提出された諸論文から、二つのことが明らかになった。一つ目はJK［藩王］国における解放闘争がセキュラーな運動だったという点だ。それは持てる者と持たざる者の間の闘争であり、その主原因は経済的な問題だった。……二つ目は、JKの解放闘争が他の諸藩王国と同じパターンで行われたという点だ。それは国［インド］全体で行われていた解放闘争と密接な結び付きを持っていた。全インド国民会議派のリーダーたちがJKにおける闘争のリーダーたちを啓発したのは歴史的事実である。」［Yasin and Rafiqi 1980: vii］[13)] このセミナーにおける歴史読解の特徴は以下のようなものである。まず、イスラム教徒カシミール人の政治的覚醒の歴史的表現となった1931年7月のスリナガル暴動、およびこれをきっかけに開始されたシェイク・アブドゥッラーらイスラム教徒の政治運動から、実際にはそこに色濃く存在したコミュナルな要素[14)]への言及を外し、これをイスラム教徒カシミール人の経済的闘争と規定する（実際に31年当時、イスラム教徒カシミール人の多くは貧農だった）。さらに、1930年代を通じてアブドゥッラーらが国民会議派（とくにネヘルー）の政治理念および政治力に急接近して行った事実を以って、アブドゥッラーとその政党ナショナル・コンフェレンス（以下NC）の政治軌道を本質的に「セキュラー」なものと定義づける。以上のような歴史読解は、内容的にはすでに印パ独立直後の時期に出現していたが、それが客観的事実として学術研究において詳述されることはまれだった。そしてこのセミナーに続く歴史再検討の動きは、上述のような歴史読解を多くの活字テキストとして顕在化させ、その後のカシミール現代史研究を方向づけていくこと

になる。

この歴史再検討の動きの代表的成果が、上記セミナーおよび論文集にも参加したG. H. カーンによる、1930年代カシミール政治についての初の詳細な研究書『カシミールの解放闘争―1931 – 1940』（1980年刊）だった［Khan 1980］。同書はきわめて学術的な研究書であり、その限りで30年代カシミール政治過程の様々な問題や矛盾を克明に記述しているのだが、著者はその序文で「全JKムスリム・コンフェレンス［NCの前身］のもと展開されたイスラム教徒大衆の解放運動にコミュナルな性格は皆無だった」という、本文諸章の記述とやや矛盾する強調を行っており［Khan 1980: x］、同書もやはり上記の歴史読み替えの流れの中にあったことをうかがわせる[15]。また同書の重要な特徴のひとつは、その叙述が1940年で終っている点である。1940年代のアブドゥッラーとNCは、ここで詳述はできないが、ジンナーのムスリム連盟やインド共産党にも接近しており、その政治は純粋に国民会議派の同盟者あるいは「セキュラー」とは形容し難いものだった[16]。そして、これら40年代の諸過程への本質的な言及を避ける点は、ここで述べた一連の歴史再検討の動きに共通する特徴だった。

4. 考察

4-1. なぜ1975～82年の時期にこの用語が誕生したのか

前章で述べた1970年代末～80年代初頭のカシミールにおける文化・歴史への関心、それをめぐる言説や「カシミーリーヤット」のような用語の流通の開始・拡大は、カシミールをとり巻くインドの状況ともある程度連動するものだった。ここでは本稿最初の設問「なぜ1975～82年の時期にカシミーリーヤットという用語が誕生したのか」に答えるにあたり、70年代末～80年代初頭インドの文化・言説状況の主な特徴として、活字メディアの伸長・ビジネス化とヒンドゥー・ナショナリズムの活発化についてまず手短に指摘しておきたい。

この時期のインドの活字メディアについて言えば、その最大の特徴はメディア研究家コーフリーが述べるように「出版産業のビジネス化」にあったと思われるが［Kohli 2003: 22］、時事週刊誌の大手『インディア・トゥディ』の創刊（75年）や、非常事態期のメディア統制が解除された際の政治・時事問題本出版ブーム（77年）［Suri 1978］などもその変容を促す重要な要素だった。こうした過程を通じて、より詳細な時事問題分析が週刊誌ほかのマスメディアにおいても求められるようになり、活字メディアにおけるジャーナリズムの言説と学術的な政治分析言説の境界は限りなく曖昧化して行くことになる。また全体として、規模・ビジネス化の面で大きな伸長を遂げた活字マスメディアは、インド中産階級の政治意識形成において、以前にも増して大きな役割を演じるようになった。

ヒンドゥー・ナショナリズムについて言えば、1970年代末のジャナタ・インド中央政権がヒンドゥー・ナショナリズムを党是に掲げるジャン・サン党（BJPの前身。BJPはBharatiya Janata Party〔インド人民党〕の略称）を取り込んで成立し、またこの政権がヒンドゥー・ナショナリスト的傾向の強かったデサーイーをインド首相に据えたことは、その勢力拡大の大きな一歩だった。そして

1980年に政権に返り咲いたインディラ・ガーンディーと国民会議派もまた、この政権復帰以降、ヒンドゥー・ナショナリズムの言説を駆使するようになって行く。（以下「国民会議派」は「国民会議派（Ⅰ）」を指す。）1980年代におけるヒンドゥー・ナショナリズムの台頭は基本的にBJPではなく国民会議派によって準備されたとする指摘が示すように［堀本 1997: 20–21］、このヒンドゥー・ナショナリズムの台頭は、インド政治のいわゆるセキュラー陣営（国民会議派）とヒンドゥー・ナショナリスト陣営（BJP）の両者を巻き込んだ現象だった。それはけっして一部の宗教ナショナリスト勢力の伸長のみを意味せず、インドの政体全体における文化／宗教ナショナリズムの浸透を示唆する現象だったのである。

前章で概観したところの、出版を含む文化活動におけるカシミール・ナショナリズムの伸長は、大まかに言って、インドにおけるこうした活字メディアとヒンドゥー・ナショナリズムの伸長に呼応していたといえるだろう。そして用語「カシミーリーヤット」の誕生は大局的には、増殖し続ける活字メディア言説の中でカシミール・ナショナリズムについて効果的に語る必要性の結果であったと考えられる。さらにいえば、この用語をめぐる1980年代以降の層の厚い活字言説群の存在自体、20世紀末のインド政治における正当性（legitimacy）が以前にも増して中産階級マスメディア言説の場でたたかわれるようになった事実を示しており、用語「カシミーリーヤット」はまさに、学術的なものを含むメディア言説の場でカシミール問題をめぐる政治的正当性を争う必要のためにこそ誕生したといえよう。

4-2. 創成期におけるこの用語の意味・用法が失われたことの意味

①創成期「カシミーリーヤット」の長所

本稿で概観したように、創成期における用語「カシミーリーヤット」の使命は、JK独立というカシミール・ナショナリズムの直截的政治表現が無効化した状況においてカシミール文化・社会の尊厳を保持するという微妙なものだった。それは直接に政治的な用語ではあり得ず、むしろ文化・歴史をめぐる議論を通じて批判的かつ間接的に政治にフィードバックする用語であった。この用語はまた、政治的ナショナリズムを視界から失ったカシミール知識人たちの自発的な内省と探究（「カシミールとはそもそも何なのか？」）を象徴してもいた。それをとりまく言説は基本的にカシミール・ローカルな性質のものであり、その探究にはカシミーリー・パンディット（ヒンドゥー教徒）の学者たちが多数参画した一方、一部イスラム教徒によるその探究の背後には政治的ナショナリズム＝JK独立への情熱も秘められていた。

そしてこうした自発的、ローカルかつ多様な方向性をファジーにまとめ得たのが、晩年期のシェイク・アブドゥッラーという存在だった[17]。アブドゥッラーのカリスマと老練な政治力は、用語「カシミーリーヤット」に対しても、権力からの批判的な距離と自発性を与えることを可能にしたのである。

②批判性および自発性の喪失

ところがアブドゥッラーの死後、この用語からは権力からの距離と自発性がひとつひとつ奪われて行くことになる。

まず1983年のJK州議会選挙において、シェイク・アブドゥッラーの息子ファルーク・アブドゥッラー（当時JK州首相）がこの用語を選挙スローガンとして用いたため、「カシミーリーヤット」は政治権力のプロパガンダ用語と化してしまう。同時に、この選挙スローガンが「ヒンドゥー教徒の危機」を訴えてジャンムー地域での圧勝を狙ったインディラ・ガーンディーの国民会議派との対抗上用いられたため、用語「カシミーリーヤット」は「カシミールのイスラム教徒アイデンティティー」というコミュナル色を帯びるに至った。

そして1989年のカシミールにおける分離主義ゲリラ活動勃発後、インド・ナショナリズムの立場からカシミールをインド国内に引き留めるべく、用語「カシミーリーヤット」はインドとカシミールに共通のセキュラー文化の象徴として用いられるようになる。また、このインド・ナショナリスト的用法の特徴的な点は、カシミールのナショナリズムは自明で純粋なナショナリズムではなく、「エスニック」もしくは「サブ」ナショナリズムでしかないと規定する点だった。（こうした意味・用法の典型例については既に本稿第2章で触れた。）1990年代以降、この用語はインド全国レベルもしくは国際レベルにおいて、以上のようなインド・ナショナリスト的含蓄のある意味・用法で主に非カシミール人学者・コメンテーターらによって使用・普及・一般化され、当然ながら、カシミール人による自発性の要素はそこから失われて行った。

③評価

今日、地元カシミール社会において「カシミーリーヤット」は、インド政府のプロパガンダ用語、もしくは修正の必要な概念であると一般には受け取られている[18)]。用語「カシミーリーヤット」がそもそも、学術的なものを含むメディア言説の場でカシミール問題をめぐる政治的正当性を争うために誕生したのだとすれば、上のような形で90年代以降一般化したこの用語の現形態は、カシミール人がメディア言説上の争いに一方的に敗北し、自らのアイデンティティーを表現するはずの用語さえも奪われたサバルタン的状況に置かれている事実を指し示しているといえよう。

註

1）「Kashmir」という語のカタカナ表記に関して、近年はヒンディー語のスペル・発音に準じた「カシュミール」という表記が多くみられるが、本稿ではインドJK州内カシミール地方におけるこの語の発音により近い表記「カシミール」を採用する。（同地方首都「Srinagar」に関しても同様の理由から「シュリナガル」ではなく「スリナガル」を採用する。）なおインドJK州（2001年総人口約1,007万人）は三つの地域に大別され、その人口の内訳は、イスラム教徒（主にスンニ派）が95％以上を占めるカシミール地方（総人口比54.0％）、約3分の2がヒンドゥー教徒で約3分の1がイスラム教徒のジャンムー地方（同43.7％）、半数強を仏教徒、半数弱をイスラム教徒（主にシーア派）が占めるラダック地方（同2.3％）となっ

ている。なお重要な少数派コミュニティーとして、カシミール地方のカシミーリー・パンディット（ヒンドゥー教徒）や、ジャンムー地方を中心にカシミール地方にも分布するスィク教徒がある。地理的にJK州はインド最北部に位置し（総面積101,747平方km）、ヒマラヤ山あいの渓谷であるカシミール地方が州北西部（総面積比16.0%）、パンジャーブ平原最北部とカシミール渓谷周辺のヒマラヤ小渓谷群からなるジャンムー地方が州南部（同25.8%）、植生の少ない広大な高原部であるラダック地方が州北東部（同58.1%）を占める。こうした地理条件の多様性は言語にも反映し、カシミール地方ではカシミール語、ジャンムー地方では一部ヒマラヤ小渓谷群におけるカシミール語やパハーリー語の使用を除けばドーグリー語（ほぼパンジャーブ語の方言）、ラダック地方ではチベット語系のラダック語が話されるほか、書き言葉はカシミール地方が主にウルドゥー語、ジャンムー地方とラダック地方が主にヒンディー語となっている（ただし印パ独立の時期まではこれら全地域でウルドゥー語が書き言葉として使用された）。ちなみに、ジャンムーやラダックの地域アイデンティティー意識が高まった1970～80年代以前の時期には、JK州全体を「カシミール」と呼ぶのが一般的だった。

2）この論文が執筆された1990年代初頭は学術界における用語「カシミーリーヤット」流通の最初期にあたり、英文におけるその綴りは一定ではなかった。ヴァーシュニーはこの論文で、今日スタンダードとなっている「Kashmiriyat」ではなく、「Kashmiriat」の綴りを採用している。

3）ズチはこの箇所への脚注で、M. J. アクバールとヴェリンダル・グローヴァーの著書、編著書［Akbar 1985; Grover 1995］をこれら二つの政治的プロジェクトの前者に、スミット・ガングリーとスマントラ・ボースの著書［Ganguly 1997; Bose 1997］を後者に属すると述べ、大ざっぱに代表的な先行研究の整理を行っている。

4）「最初のアブドゥッラー政権期」は解釈基準によって様々に規定できるが、ズチは1948～53年と設定している［Zutshi 2003: 2］。他にも例えば、アブドゥッラーがJK非常事態行政の長として実権を握った1947年10月に始まるとする見方などがある。

5）この概念の成立過程は、インド独立前後の時期のネヘルーによる、カシミール描写表現のめざましい変化にも見て取れる。ネヘルーは1946年8月の段階では、カシミール人について「非常に激しやすく、臆病で、ときに暴力的になりがち」であると描写し、また政治的にはパンジャーブのウルドゥー語新聞に大きく影響され、パンジャーブのコミュナリズムを共有していると記した（国民会議派ワーキング・コミッティーに提出された「第二回カシミール訪問ノート」より）。ところが彼は、インド軍によるカシミール進軍直後の1947年11月憲法制定議会の席では、カシミール人がシェイク・アブドゥッラーの指揮のもと「コミュニティー間の結束（communal unity）が獲得しうるものは何であるかの例をインドの他地域すべての人々に示し」たと述べ、また「カシミールとインドは幾時代も前から、様々な意味の絆によって結ばれている」と強調した。さらに、その後JK独立に傾いたアブドゥッラーを逮捕しJK州をインド領土の不可分の一部と見なす姿勢の固まった1953年9月のインド下院演説では、「われわれはカシミール問題がわれわれにとって象徴的であると常に考えてきたし、またこのことはインドにとって計り知れない意味を持っている。カシミールは、インドがセキュラーな国家であることをそれが体現している点で象徴的であり、またその住民の大多数がイスラム教徒であるにもかかわらず、それがその自由意思によってインドに加わることを望んだ点で象徴的である」と述べ、カシミールがすでにインドのナショナル・イデオロギー＝セキュラリズムの重要な構成部分となっていることを示した。［Sharma and Bakshi 1995: 117–118, 238–239, 308］

6）Ibn Mehjoor は20世紀を代表するカシミール語詩人メフジュール（Ghulam Ahmad Mehjoor、1885～1952）の息子。

7）1970～80年代当時、カシミールで最も読まれていた日刊紙は『Aftab』や『Srinagar Times』といったウルドゥー語紙（スリナガル発行）であったと思われる。当時のJK州最大手英字紙『Kashmir Times』（ジャンムー発行）はカシミールを含むJK州全土で進歩的知識人の支持を得ていたが、情報伝達速度が未だ遅かった当時、ジャンムー発行の同紙のカシミールに関する報道はやや手薄になりがちだった（とくに70年代）。現在カシミールで最有力の日刊紙『Greater Kashmir』は英字紙だが、これが登場するのは1990年代に入ってからのことである。

8） カーンによれば、1970 年代半ばのこの時期に「カシミーリーヤット」の語とこれに伴う議論を最も盛んに展開したのは『Srinagar Times』だった［KI］。なお、この時期の「カシミーリーヤット」をめぐる事情については［Khan 2008］も参照。

9） 正式名称は Jammu and Kashmir Academy of Art, Culture and Languages、通称 J&K Cultural Academy。

10） この二人の詩人聖者が基本的にヒンドゥー教徒だったかイスラム教徒だったかについては未だに議論が絶えず、このため呼称に関しても、前者の場合イスラム教徒は Sheikh Nūr-ud-din、Sheikh-ul-Alam、Alamdar-i Kashmir などと呼ぶのに対しヒンドゥー教徒（カシミーリー・パンディット）は Nund Rishi と呼ぶなど相違がある。なお女性詩人 Lal Ded に関しては、Lala Arifa と呼ぶイスラム教徒や Laleshwari Devi と呼ぶヒンドゥー教徒もあるようだが、Lal Ded がより一般的［Zutshi 2003: chapter 1, etc.］。なお、15 世紀カシミールのこれら一群の詩人聖者たちに対しては、一般的に「スーフィー」ではなく独自のカテゴリー「リシ」（rishi）が適用される。

11） この他、この時期のカシミール文化の定義･検討の動きの代表的なものの一つにイクバールとニラーシュの編著［Iqbal and Nirash 1978］の刊行がある。同書は、JK 州政府情報部が印パ独立の時期から細々と続けてきた月刊誌『Kashmir Today』（JK 社会・文化についての記事を収録）や JK 州の代表的な公研究機関の一つ Research & Libraries, Srinagar（同書編者の一人 S. M. イクバールは当時この機関のディレクターだった）に集積されたカシミール文化に関する知見をコンパクトにまとめた、当時としては類例のない書物で、その献辞には同書をやはりシェイク・アブドゥッラーに捧げる旨が記されている。なお 70 年代には古代から現代までをカバーした、カシミール人史家によるカシミール史の大著がいくつか出版されており［Bamzai 1973; Sufi 1974］、アブドゥッラーの文化政治を抜きにしても、自らの文化・歴史への関心と学術的研究への気運は 1970 年代のカシミールにおいて高まっていたと言える。

12） 口承の詩篇／歌謡、諺、伝説などを通じてカシミール大衆に愛されてきたこれらの詩人聖者たちが歴史的人物であることに疑いはないが、彼らの詩篇の原形態を同定することはかなり難しく、最も原形態に近いと考えられる各種の歴史的手写本にも、それが作成された当時の口承詩篇・伝説が混入している可能性がある。これについては例えば、シェイク・ヌールッディン／ナンド・リシの詩篇群 Gongal Nama テキスト成立年代について M. I. カーンと A. Q. ラフィーキーの間で交わされた論争を参照［Khan 2002: preface to the 3rd ed.; Rafiqi 2009: preface to the 3rd ed.］。また、これらの詩篇はその原形態の同定が難しいだけでなく、口承で伝わり現在もポピュラーな詩篇群を除いて、その出所の怪しい手写本詩篇群の解読自体が難しい。例えばシェイク・ヌールッディン／ナンド・リシの詩篇を出来得る限り信憑性の高い手写本から集めた既述『多様性の統一』を一瞥すれば、それが現在では失われた祭りや習俗を指すと思われる語彙など、同書編訳者にとっても半ば意味不明の語彙で満ちていることは明らかであり、またこうした手写本の時代には現行のカシミール語表記システム（20 世紀に成立）が存在しなかったことなども手伝って、これらの詩篇の解読は、同書編訳者であるパリモーがその序章で告白している通り、「その正確な解釈にたどりつくには、いわば第六感に頼らざるを得ない」［Parimoo 1984: xviii］といった性質のものとなっている。いずれにせよ、これら詩人聖者たちの詩篇群をめぐる学術研究は未だ端緒に就いたばかりであり、今後の研究の進展が待たれる。

13） 当時のカシミール大学長（この引用文の執筆者）は Rais Ahmad。このセミナーの詳細については当該論文集［Yasin and Rafiqi 1980］の序文と序章を参照。

14） ジャンムーにおけるイスラム教の礼拝やコーランの扱いをめぐる諸事件に端を発する 1931 年スリナガル暴動は、「イスラム教の危機」スローガンとヒンドゥー教徒への攻撃を伴った。この暴動の詳細については［Khan 1980; Bazaz 2002］の他、［Abdullah 1993］や、カシミーリー・パンディットのコミュニティー誌『Koshur Samachar』に掲載された同時代人の証言（June 2000, p.46）を参照。また 1930 年代前半におけるアブドゥッラー政治の主眼は、イスラム教徒の権利主張と同時にスリナガルにおけるイスラム教徒他宗派・派閥の排斥にあり、その活動は「イスラム教徒政治」の枠内に納まるものだった。この点については［Khan 1980］および［Rai 2004］を参照。

15） なお、同書もやはりシェイク・アブドゥッラーのメッセージがその巻頭を飾っている。

16）こうした1940年代の政治過程に関しては、40年代を通じて反NCの立場から社会主義活動を繰り広げたバザーズによる記録［Bazaz 1954］の他、40年代のアリーガルで当時流行の共産主義とムスリム連盟の双方に感化された後カシミールでNCに加わったミール・カシムの自伝［Qasim 1992］や、40年代カシミールにおける様々な反NC政治運動に詳しいザヒールッディーンの著書［Zahir-ud-Din 2007］などを参照。

17）この晩年期シェイク・アブドゥッラー政権には、後続の州政権担当者ら（シェイクの息子ファルーク・アブドゥッラー他）とは異なる以下のような幾つかの特徴が存在した。①インディラ・ガーンディーの中央政権から距離を取ると同時に、インド全国レベルの野党勢力からも一定の距離を取った。この均衡は、後続のファルーク・アブドゥッラー州政権がインド全国レベル野党勢力と協力関係に入った時点で崩れ、これがやがて中央政権によるJK州政治への強権的介入（84年ファルーク・アブドゥッラー州首相解任など）を招くことになる。②ヒンドゥー・ナショナリスト政党BJPの全国レベル・リーダー（A. B. ヴァジパイー）と良好な関係を保ち、州内のヒンドゥー教徒多数派地域ジャンムーにおける政治の安定を図った。③かつての国民投票戦線活動家のみならず、JK独立を唱えて70年代初頭に活躍したゲリラ団体Al Fatahの元活動家らにも年金（Freedom Fighters' Pension）を支給しその懐柔にあたったほか、カシミール大学などにおける分離主義的学生運動に対しても、強い弾圧策をとって彼らを刺激するようなことはしなかった。またシェイク・アブドゥッラーは、カシミールの若者たちのこの程度の分離主義行動に対して、インド中央政府に文句を言わせないだけの政治的カリスマ性を保持していた。

18）今日のイスラム教徒カシミール人にとってのこの用語の位置を典型的に示していると考えられるのが、1990年代半ば以降のカシミールを代表する英字紙『グレーター・カシミール』紙上に2005年12月から06年2月にかけて掲載された、カシミーリーヤット概念をめぐる一連の論考である。そこではこの概念が様々な形で定義づけられ、この概念が今日のイスラム教徒カシミール人の間で持ち得る意味の幅の広さを示している。しかしその議論に共通してみられるのは、これまでのカシミーリーヤットをめぐる諸言説に偏見が含まれており、カシミーリーヤット概念は再考を要するとする点である。とくに「カシミーリーヤットはサブ・ナショナリズムに非ず」と題されたモハンマドの議論［Muhammad 2005］や、カシミーリーヤットの意味の一つが「カシミールがひとつのネイションであり、他のネイションに含まれ得るエスニック・グループなどではないという認識」にあるとするメフジュールの議論［Mehjoor 2006］は、エスニシティーやサブ・ナショナリズムといった概念を用いたそれまでのカシミーリーヤット言説を批判すると同時に、客観性を装ったそれらの言説の背後にインド・ナショナリズムが存在し得る事実を示唆している。

一方、カシミーリー・パンディットの間では今日、カシミーリーヤット概念、とくにカシミールのセキュラーな文化伝統を指すそれを誤った概念として否定する場合が多い。これは、シェイク・アブドゥッラーをはじめとするイスラム教徒カシミール人の政治が、表向きはセキュラリズムを標榜しながら、実質的にはマジョリティー主義の押し付けでしかなかったというパンディット側の見方を反映している。いったんカシミールにおけるセキュラリズム＝カシミーリーヤットの存在を認めてしまえば、カシミールにおけるマジョリティー支配の陰に存在したカシミーリー・パンディットの苦難は例外的事実として忘れられかねず、これはパンディットたちにとっては当然、受け入れがたいことである。例えばコウルによる次の一節を参照。「1947年以降を含め、イスラム教徒が権力を握ったいついかなる時代にもパンディットが苦難にさらされたことは歴史が立証している。こういった歴史ははたして“数世紀来のカシミール人の一体性と結束”を意味するだろうか？これが“カシミーリーヤット”なのだろうか？それは、ひそかにイスラム教による支配を実現するための煙幕として広められた作り話にすぎない」［Kaul 2004: 170］。また、こうしたカシミーリー・パンディットによるカシミーリーヤット概念否定の背景には、彼らの大多数が1990年初頭にカシミール外へ移住したため、カシミール・セキュラリズムの擁護を通じてカシミールにおける自らの安全確保を図る必要性がなくなったという事情も作用している。

参照文献

堀本武功、1997、『インド現代政治史―独立後半世紀の展望』、刀水書房。

Abdullah, Sheikh Mohammad (tr. Khushwant Singh), 1993, *Flames of the Chinar: An Autobiography*, New Delhi: Viking.

Akbar, M. J., 1985, *India: The Siege Within*, England: Penguin Books.

———, 1991, *Kashmir: Behind the Vale*, New Delhi: Viking.

Bamzai, P. M. K., 1973, A History of Kashmir, New Delhi: Metropolitan Book Company.

Bazaz, Prem Nath, 1954, *The History of Struggle for Freedom in Kashmir*, New Delhi: Kashmir Publishing Company.

———, 2002 [1st ed. 1941], *Inside Kashmir*, Srinagar: Gulshan Publishers.

Bose, Sumantra, 1997, *The Challenge in Kashmir: Democracy, Self-Determination and a Just Peace*, New Delhi: Sage.

Fazili, Manzoor, 1987, "Sheikh Abdullah: The Last Phase," *Shiraza* (English), October, pp. 70–81.

Ganguly, Šumit, 1997, *The Crisis of Kashmir: Portent of War, Hopes of Peace*, Cambridge: Cambridge University Press and Woodrow Wilson Center Press.

Grover, Verinder (ed.), 1995, *The Story of Kashmir: Yesterday and Today*, Vols. 1–3, Delhi: Deep and Deep Publications.

Igbal, S. M. and K. L. Nirash (eds.), 1978, *The Culture of Kashmir*, New Delhi: Marwah Publications.

Khan, Ghulam Hassan, 1980, *Freedom Movement in Kashmir: 1931 – 1940*, New Delhi: Light & Life Publishers.

Khan, Mohammad Ishaq, 1983, *Perspectives on Kashmir: Historical Dimensions*, Srinagar: Gulshan Publishers.

———, 2002, *Kashmir's Transition to Islam: The Role of Muslim Rishis*, 3rd Edition, New Delhi: Manohar.

———, 2008, "Rediscovering Kashmiriyat," *Greater Kashmir*, August 14.

Kohli, Vanita, 2003, *The Indian Media Business*, New Delhi: Response Books.

Madan, T. N., 1995, "Meaning of Kashmiriyat: Cultural Means and Political Ends," Gull Mohd. Wani (ed.), *Kashmir: Need for Sub-Continental Political Initiative*, New Delhi: Ashish Publishing House [初出：*Times of India*, June 4, 1994].

Mehjoor, Aatif Ahmad, 2006, "Is there such a thing as Kashmiri Nationalism?," *Greater Kashmir*, January 14.

Muhammad, Zahid G., 2005, "Kashmiriyat is not sub-nationalism," *Greater Kashmir*, December 28, 29.

Pandit, M. Amin, 1997, *Alamdar-i-Kashmir: Standard-bearer, Patron-saint of Kashmir*, Srinagar: Gulshan Publishers.

Parimoo, B. N. (tr. and intro.), 1984, *Unity in Diversity*, Srinagar: J&K Academy of Art, Culture and Languages.

Qasim, Mir, 1992, *My Life and Times*, New Delhi: Allied Publishers.

Rafiqi, Abdul Qaiyum, 2009, *Sufism in Kashmir*, 3rd Edition, Srinagar: Gulshan Books.

Rai, Mridu, 2004, *Hindu Rulers, Muslim Subjects: Islam, Rights, and the History of Kashmir*, New Delhi: Permanent Black.

Sharma, Suresh K. and S. R. Bakshi (eds.), 1995, *Nehru and Kashmir*, Jammu: Jay Kay Book House.

Sufi, G. M. D., 1974, *Kashir*, New Delhi: Light and Life Publishers.

Suri, Donna, 1978, "The Emergency Reviewed," *Seminar*, 221, January, pp. 22–29.

Varshney, Ashutosh, 1992, "Three Compromised Nationalisms: Why Kashmir Has Been a Problem," Raju, G. C. Thomas (ed.), *Perspectives on Kashmir: The Roots of Conflict in South Asia*, Boulder: Westview Press.

Yasin, Mohammad and A. Qaiyum Rafiqi (eds.), 1980, *History of the Freedom Struggle in Jammu & Kashmir*, New Delhi: Light & Life.

Zahir-ud-Din, 2007, *Bouquet: A Tribute to the Unsung Heroes of Kashmir*, Srinagar: Jammu and Kashmir Coalition of Civil Society.

Zutshi, Chitralekha, 2003, *Languages of Belonging: Islam, Regional Identity, and the Making of Kashmir*, New Delhi: Permanent Black.